

ドラムサークルの魅力と展望について

—10の質問から—

一般社団法人 VMC グローバルジャパン・
ドラムサークルファシリテーター研修所
代表理事 横田 友子

本稿の主旨

本稿は2022年7月2日に開催された音楽療法講演会「ドラムサークル・ファシリテーション体験セミナー —リズムでつながろう!—」(武庫川女子大学生生活美学研究所・音楽学部共催 図1)の閉会後に行われた武庫川女子大学応用音楽学科松本佳久子教授および一ノ瀬智子教授との振り返りを基にドラムサークルの本質と魅力、そしてこれまでの輪の広がりと今後の展望について10の質問に答えるという対話形式で記しました。



図1 生活美学研究所定例研究会 講演会風景

10の質問

1) ドラムサークルの魅力について教えてください。

音楽の本質とは社会の構造そのものの中で明らかとなるものでした。

ドラムサークルの魅力はその音楽の本質を再認識しようとする試みにあります。コミュニケーションとしての言語が発達する遙か以前から人びとは収穫祭、結婚式、お葬式の場から、戦争に至るまで音楽によってコミュニケーションを取っていたと言われていています。喜怒哀楽、共感、そして時には反感を音とリズムで表現してきたのです。しかしながら以後の文明発達、さらに市民社会の到来は、それまで閉ざされた空間と特定の階級の人びとのみを対象にすることで成立し存在が許容されていた「アート」としての音楽を一般に開放することとなりました。特に19世紀後半レコードが発明されて以降の音響機器技術の目覚ましい進歩は、我が家の中でさえ名高い音楽家の名演奏を大きな臨場感と共に繰り返し楽しむことまでも可能としました。これら科学技術の進展により人々は演奏技量の高さや美を追い求める「アート」としての側面のみを主体として音楽を認識するようになり、コミュニケーションツールとしての音楽の本質は、むしろ原始的で非文化的・非市民的なものとして蔑みの対象とすらされるようになりました。ところが20世紀に

至り、日本も含めイギリス、ヨーロッパ大陸の多くの都市が大戦によりそれまで至極当然に存在していた各々のコミュニティと共に灰塵と帰してしまいました。家族や隣人との関係が薄れ途絶えるなどの変化にとどまらず国家や都市、文化の再構築という社会構造そのものの変化が起こり、昔から築き上げてきた「コミュニティづくり＝まちづくり」を再認識せざるを得ない状況となったのです。

ドラムサークルとは誰もが持ちうる潜在能力を引き出し、リズムを通してコミュニケーションを図る双方向的音楽創造イベントです。ドラムサークルには多くの種類がありますが、その中で私たちが行っているドラムサークルは、ファシリテーター・コミュニティ・ドラムサークルと言われ、ファシリテーターというガイド役が存在するコミュニティ・ドラムサークルです。この方法論は50年以上前にアメリカ・サンタクルーズ在住のアーサー・ハルによって考案されたものです。アーサー・ハルは、ヴィレッジ・ミュージック・サークルズ(以下 VMC と略す)を創設し、現在 VMC は、「VMC グローバル」という世界規模の団体へと発展を遂げています。

VMC グローバルでは、「間違いは存在しない」という基本コンセプトのもと、年齢・性別・職業・健康状態など、ともすれば一般社会において人と人との間の壁ともなり得る条件をすべて取り払い、どのような状況においても互いに認め合い、コミュニケーションを大切にする心を育むことを目的として、ドラムサークルを通じて安全で安心な音楽創造の場を提供しています。

実際の現場ではプロの打楽器奏者が奥様と3歳のお嬢さんと一緒にドラムサークルに参加し、三人三様の在り方で他の参加者と一緒にリズムアンサンブルを楽しまれたり、脳梗塞による麻痺で車椅子生活の高齢女性と一緒に参加するご家族や、タイコ好きの聴覚障がい者、リズムに合わせ踊りたいダウン症の小学生、楽譜の無い即興アンサンブルを楽しみたい音大生など様々な参加者に会います。個人として集まった参加者がその場で初めて出会った人々と共にグループ意識を持ち、自らの意思で音楽創作に参加し、まるでオーケストラの一員のようにアンサンブル演奏を楽しむ姿はコミュニティづくりの原点です。イン・ザ・モーメント・ミュージック(=「今・ここ」の音楽)をその場に集まった多様な背景を持った人々と共に作り上げる、そのダイナミックな創造性にいつも魅了されています。

2) どのように行うのでしょうか。

ドラムサークルは、「ドラム」と「サークル」の二つの言葉から成り立っています。そして、そのドラムサークルのガイド役を「ドラムサークル・ファシリテーター」と呼んでいます。

「ドラム」は、打楽器全般を意味し、シェイカーやベルなど小さなパーカッションから和太鼓やスルドなど大きなタイコまでいろいろな楽器を指しています。また本来楽器ではないもの、空のペットボトルにビーズや豆類などを入れシェイカーにしたり、竹を割って穴をあけスリットドラムのような打楽器に加工したりなど、手作りの楽器を使うこともあります。また例えばフライパンや鍋の蓋なども叩いてみて心地よい感覚があれば、それを楽器として演奏することも許されています。

「サークル」は、車座になることを意味します。舞台と観客席、教壇と長机のように、演者と聴衆、講師と学生など、上下の関係性が発生する垂直方向の学びではなく、共に学びあう仲間という水平方向の関係性を築きやすい形状としてサークル状に席を設けます。そうすることで、ファシリテーターと参加者、または参加者同士が平等な立場でありファシリテーターを含めた全員が双方

向的に反応しあうことができる場であると自然に認識できるのです。

また、「ドラムサークル・ファシリテーター」は、参加者の音楽経験や参加者同士の関係性を見極めながら、全員がリズムアンサンブルを安心安全に楽しめるようガイドしていきます。参加者の音楽創造への関わり方やその意欲、さらにはその自己認識が時間とともに変容していくことを理解し、その場で生まれる「今ここ」の即興アンサンブルをファシリテーションするスキルが必要です。その場で生まれる即興的なリズムアンサンブルを注意深く聴き、参加者の反応を見極め、全体が作り上げるサウンドの感覚を読み取る力が求められます。

ドラムサークル、そしてドラムサークル・ファシリテーターについて説明しましたが、あとは参加者が目の前に置かれている各々の楽器を自由に演奏するだけです。ファシリテーターはパルスを刻みながらサークル全体に対してボディランゲージや声を使い合図を出し、参加者間の関係性を一步一步丁寧に構築していきます。そして各個人が相互にグループ意識を持ち、リズムアンサンブルの一員として「今ここ」の音楽を創り上げていく手助けをします。

また、大きなタイコを大音量で演奏するドラムサークルだけでなく、ハーモニーバー(レモ社)やトーンチャイム(鈴木楽器)、ツリーチャイムなど静かで美しい音色を奏でる打楽器や、木の実でできたラトルやカエルのギロ、レインスティックなど自然を感じる音色の楽器を使ったヒーリング系の穏やかなドラムサークルもあり、クールダウンやグラウンディングなどの目的で行われています。

また、ラテン、アフリカンなど特定文化圏のリズムや楽器に特化することなく、敢えて様々な打楽器を混ぜて演奏することで多様性や個性を尊重することを大切にしています。

3) どのような目的で、どのような場所で行われていますか。

ドラムサークルは分野を問わず種々の場所においてそこに集まった対象者に合った目的で行われています。ここでは、例として4つに絞ってご紹介します。

第1は「教育現場」。幼稚園、保育園、こども園、地域子育て支援センター、小・中高等学校、特別支援学校などの音楽の時間や、PTA 行事、地域世代間交流などで、強制ではない学びを通して自由の中のルールと個性の尊重、協調性の醸成などを目的としています。

第2に「コミュニティ・イベント」。お祭り、国際交流や男女参画事業でのイベント、カンファレンスのクロージングなどで、年齢・性別・国籍・身体自由度を超えた共生、エンパワーメント、ストレス発散などを目的としています。

第3に「医療・福祉現場」。病院、デイケア、老人ホーム、グループホーム、障がい者支援センターなどで、療法的アプローチによる健康増進、機能回復、ストレス発散、生きがいづくりなどを目的としています。

第4は「企業」。企業セミナー、新規採用者歓迎会、幹部研修、ファミリー交流会、忘年会などで、チームビルディング、職場のストレス解消、バーンアウト予防などを目的としています。この分野でのドラムサークルは日本ではまだあまり普及していませんが、アメリカ・カリフォルニア州のトヨタ社で毎週木曜日の夕方だれでも参加できるドラムサークルを開催したところ、タイコを叩くことでストレス発散し、バーンアウトを未然に防ぎ、従業員の離職率が下がったという事例が知られています。

またこの分類には当てはまりませんが、私が先駆けとして行ったのがマタニティクリニックで

のドラムサークルでした。2005年から、産前産後の女性のためのドラムサークルとして始め、8年ほど定期的に実施していました。産前の初めてママ同士の交流から始まり、やがて出産後1ヶ月検診を経てママと赤ちゃんのドラムサークルが始まりました。おっぱいを飲みながらリズムに合わせて手足を動かし、輪の中でリズムと同調しようとする赤ちゃん。体いっぱいを使って何かを表現しようとする姿は外界と繋がろうとするはじめての一步であり、リズムは人間が生まれながらに持っているコミュニケーションツールだと実感したドラムサークルでした。

4) どのような効果があるのですか。

ストレス発散、身体機能向上、創造性の喚起、自己肯定感の向上、一体感の醸成、今ここにいる実感など多くの効果が体感されています。また現在では世界中で生命科学、医療、福祉、人類社会学などの分野での研究により効果の科学的実証が進んでいます。

「ストレス発散」-- 何よりも、ドラムを叩く行為そのものがストレスの発散になります。人は何かを叩くことで日常のイライラを解消することができると言われていますが、場を間違えると暴力行為ともなり得てしまいます。ドラムサークルではタイコを叩くこと=音楽づくりであり、無自覚でさえあるストレスを創造活動に昇華させることでその軽減にも効果を発揮しています。心理カウンセラーでもあるオーストラリア在住 VMC 認定トレーナーのサイモン・フォルクナーは、アルコールやドラッグ中毒患者をはじめ家庭内暴力の被害者、非行に走る青少年などを対象にその効果を実証しています。

「身体機能向上」-- 脳梗塞後遺症などによる麻痺手にシェイカーのような小さな楽器やタイコのバチを手渡し、一緒に演奏しているうちに通常のリハビリ訓練では成し遂げられなかった可動域まで手を振り上げ、演奏を無心で楽しむ様子。また、パーキンソン病を患っている方がみんなで作りに上げるリズムのグルーブに同調することで、手足がスムーズに動き始める。などの臨床的事例を高齢者施設でのドラムサークルでは多々目にすることがあります。国内外を問わず、多くの音楽療法士、作業療法士などが楽しみながら行えるリハビリとしてドラムサークルを取り入れ効果を発揮しています。

「創造性の喚起」-- ドラムサークルでは楽譜を一切使いません。音楽経験を問わず、ファシリテーターがガイドする簡単な合図に合わせ、リズムを演奏することで音楽創造に参加することができます。どのような状況下にある人でも音楽創造を担う一員となることで、その人の内側にある創造性の芽を育て開花させ得るのです。高齢者施設などでも新たなことへ挑戦することの喜び=生きがいづくりとして効果を発揮しています。イギリスの VMC 認定トレーナーであり、ドラムサークルの分野で初めて PhD を取得したジェーン・ベントリー博士は、英国内外を問わずドラムサークルの効果とその実績をカンファレンスなどで発表しています。

「自己表現・自己肯定感の向上」-- ドラムサークルでは、大きさや形の違ったタイコ、シェイカーやベルなど多種多様な楽器を使います。どんな楽器でも奏でた一音に意味があり、みんなちがってみんないい。それぞれが違う音色や音高を持つ楽器を打ち鳴らすことで、リズムによるアンサンブルがやがてオーケストラ・サウンドのように美しいハーモニーを生み出すことがあります。美しい音楽を作り上げることができる「わたし」の存在を確認する比喩的体験学習を通して、個々の違いを認め合い、自信を取り戻しエンパワーメントされたという事例を目撃することがあります。ノルウェイの VMC 認定トレーナーのラルス・コルスタッドは、音楽教育学としてのドラムサー

クルについて修士論文を発表し、音楽教育指導者の育成に努めています。

また言葉で表現しがたい感情や感覚を、心の奥底から表面へと浮き上がらせることができるとも言われており、トラウマを抱えた方々の療法的アプローチとしての効果もイギリスやアメリカなどで実証されています。

「一体感の醸成」― ドラムサークルの本質であるリズムを通してのコミュニケーションを図ることで喜びや悲しみを分かち合い、人と人がつながりあう感覚を強めることができます。アーサー・ハルと共に日本のドラムサークル界の礎を築いたアメリカ在住のクリスティーン・スティーブンスは、ニューヨークのグラウンドゼロでのドラムサークルや、イラク北部クルド人支配地域の紛争地帯でのドラムサークルなど平和活動としてのドラムサークルを行い、一体感の醸成に取り組んでいます。

「今ここにいる実感」― ドラムサークルのもう一つの側面である、「イン・ザ・モーメント・ミュージック（今この音楽）」は、過去や未来ではなく、「今ここ」に存在する自己を実感し、今を生きている感覚を呼び戻してくれます。新型コロナウイルス感染拡大による自粛生活などで孤立した生活を余儀なくされ、未来を見通せなくなってしまいがちな状況であっても、「今ここ」に生きている実感を共有してほしいとの願いから世界中でドラムサークル・ファシリテーターが活動を拡大させていました。

5) 対象者には制限はありますか。

ありません。どんな対象者でもやってみることが大切だと考えています。聴覚障がい者のための特別支援学校や、ターミナルケア病棟、刑務所などいろいろな場所で行われています。対象者のいかに拘わらず、その対象者に合わせいかに入念に準備をすることができるかこそが重要であり、ドラムサークルの成功は準備段階でほぼ決まると言われています。VMCが主催するドラムサークル・ファシリテーター研修では参加人数、会場、楽器の配置など様々な外的要因、対象者の年齢や関係性、音楽スキルなどの内的要因、その両面に対するドラムサークルの理念とコンセプトの適応方法を学びます。ドライブを楽しむために予め天気予報をチェックし、ガソリンを満タンにし、シートベルトを装着するように、即興演奏を思う存分楽しむためには可能な限りの準備を整えなければなりません。対象者に合わせた楽器を選択し、会場のどこにサークルを作り、椅子をどのように並べるかをよく考え準備します。ただし、一旦ドラムサークルが始まってしまうと、全てのプランを捨てることも大切だと言われています。その場で生まれたリズムに耳を傾け、参加者の表情をよく読み取りながら、即興アンサンブルを作り上げていくことが重要だと考えられています。ファシリテーターは、参加者自身が望む方向へと働く力を妨げることなく、その力に従いながらもファシリテーターが最終的に目指すゴールへ向けて背中を押しサポートすることが大切です。ベテランのファシリテーターになればなるほど、どんな対象者であったとしても、ノープランでシンプルなファシリテーションで参加者全員に「今ここ」の音楽を楽しむ場を提供することができるのです。

6) 印象的な事例について教えてください。

私は前述のように、2005年から2013年まで赤ちゃん対象のドラムサークルを定期的に行っていましたが、そのきっかけとなった出来事があります。2005年、アーサー・ハルが愛媛県松山市で

初めてのコミュニティ・ドラムサークルを開き、100人ほどの参加者が集まって全員がタイコや小物楽器を演奏していた時のことです。ベビーカーに赤ちゃんを乗せて参加していたお母さんが、「こんなにぎやかな音の中でとても心地よく眠っているこの子の寝顔を見て、この子がまだお腹にいる時に検診で胎児心音を聞かせてもらった時の音を思い出しました。みんなが思いのまま鈴やタイコを叩いている創られるリズムはまさに体の中にある音のようですね。」と、私にうれしそうに声をかけてくれました。参加者が生み出すリズムはまさに鼓動そのものなのです。この体験をきっかけとしてマタニティクリニックで産前産後の女性のためのドラムサークルを始めました。ただその当時は赤ちゃんを対象のドラムサークルは、誰にも経験がなく想像さえしていなかった事例でした。

また、イギリスのジェーン・ベントリー博士は、以下のような体験を語っています。「私は、自分が人生で初めて病院でセッションをした時のことを今でも覚えています。車椅子に座り、内こもった様子の老人——彼は自分の周りの世界に興味を示さずその変化にも気付いていないようでした。ところがリズムが鳴り始めると、私は彼が指でトントンとリズムを刻み始めていることに気が付きました。しばらくすると、彼の手全体が動き始めました。そして、彼の視線が上向き、何が起きているのかと周りを見渡し始めました。両手までが動き始めたことを見出した私が彼にドラムとスティックを2本手渡すと、とても複雑なドラムソロを演奏するではありませんか！この後、私たちは、ドラム演奏を通しての会話を楽しみ、終いに、彼は喜びいっぱいの表情を浮かべ『ほんとうにありがとう』と囁きました。セッションが終わると看護師たちから、彼は6年間言葉を発したことがなかったことを知らされました。まさにその瞬間、私は音楽の力を、そしてドラムを演奏する能力には何らの制約も存在しないことを確信したのです。」

その他、学校でのドラムサークルでは普段の学校生活では見られない生徒の意外な一面を見たと、驚く先生の声をよく耳にします。先述の自己肯定感の向上効果により、言葉で表現しがたい感情や感覚を心の奥底から表面へと浮き上がらせることができた証かもしれません。

ドラムサークル・ファシリテーターはドラムサークルの現場において「ヒトは無限の多様な自己決定の形を取りながら存在し、さらにその存在を表現しようと試み続けている」ということを忘れてはなりません。リズムの創造に「参加する」「参加しない」さえ多様な自己決定表現の一つであり、形作られつつあったリズムの調和を「破壊」しようとする試みもまさに「参加」の表現なのです。「参加しない」は、「空白というリズム」の創造表現であり、「破壊的なリズム」は「破壊の後の再生」のスタートを告げる輝かしい号砲ともなり得るのです。いかなる方法、形態をとった表現であれ、それを「拒絶」「排除」しようとするような対応はドラムサークルには存在しないのです。

7) 由来や歴史について教えてください。

最初にお話しした通り、ドラムサークルの歴史を遡ると、太古まで遡ります。人が車座になり、祝いや祈りなどを共有する手段としてリズムを奏でてきました。日本でも神事や仏事で太鼓や鐘を打ち鳴らし祈りを捧げています。このようなグループドラミングは世界中の文化の中に存在し、ドラムサークルの由来には諸説あります。ここでは、VMCの創始者であり、ファシリテーター・ド・ドラムサークルを立案し、コミュニティ・ドラムサークルの基礎を築いたアーサー・ハルの歩んできた歴史についてご紹介します。1960年から70年にかけてヒッピー文化が盛んな頃、フリード

ラミングの一種である「ヒッピーサンダー（アナーキスト）・ドラムサークル」が行われていました。また一方では公民権運動による人種差別撤廃運動に伴い、元来アフリカにルーツを持つアメリカ人さえにも許されなかったジェンベなどアフリカの楽器演奏が解禁されるなど、特定文化圏のリズムに対する差別も撤廃され自由に演奏されるようになりました。これらの変化はアメリカにアフリカンリズムをはじめ多様な文化圏のドラマーやパーカッショニストを集わせることとなり、「特定文化リズム・ドラムサークル」も盛んに行われはじめました。前者はルールがなく自由でしたが音楽的な達成感はなく、後者は伝統を重んじ決められたリズムとパート以外の演奏を許されず即興を楽しむことはできませんでした。幼いころからリズムを演奏することに魅了されていたアーサー・ハルは、青年になるとラテンやアフリカンなど特定文化リズムも学び、上記両方のドラムサークルに参加していました。やがて彼はカリフォルニア大学サンタクルーズ校でヴィレッジ・ミュージックというユニバーサル・リズムを教え始めました。両方のドラムサークルに参加し、どちらの長所短所をも理解していたアーサー・ハルは、パーカッショニストやドラマーだけでなく経験のない人たちも、また様々な特定文化リズムのドラマーたちも、その経験と文化の壁を超えて一緒に楽しめる「コミュニティ・ドラムサークル」を始めました。そこではリズムはユニバーサル・ランゲージであり、スピリットを分かち合うコミュニティ・イベントであり、誰でも参加できるイベントとして学校や企業、病院などでも行われるようになりました。

アーサー・ハルは、ドラムサークル・ファシリテーターとして活動するのみならず、ドラムサークル普及のためドラムサークル・ファシリテーターの養成も始め、アメリカ国内にとどまらずヨーロッパ、アジアなど世界中で研修を開催しています。毎年夏にハワイで開催されている研修は、コロナ禍の影響で2年の空白はあったものの昨年25年目を迎え、アメリカ国内だけでなくヨーロッパ、アジアなど彼が育てたドラムサークル・ファシリテーターは一万人を超えています。

8) 世界、日本でどれくらい広がっているのでしょうか。

世界五大陸全てで VMC 理論を学んだドラムサークル・ファシリテーターが活躍しています。この世界的広がりにはアメリカ・ロサンゼルスにあるドラムメーカー・レモ社が大きく貢献しています。レモ社の創設者である故レモ・ベリーとアーサー・ハルは盟友として、ドラムサークル普及のため共に歩んできました。日本には、2000 年代初めにレモ社パーカッション総輸入元の旧 ヤマハミュージックトレーディング株式会社（現 株式会社ヤマハミュージックジャパン）がドラムサークルを紹介し、同社が事務局となってドラムサークル・ファシリテーターのための協会が設立されました。また同時期に DRMAGIK（主宰：佐々木薫）が初めてアーサー・ハルを日本へ招聘し VMC 理論を日本でも学べる環境の土台作りを行いました。2012 年以降はオレンジブブン（共同主宰：三原典子、横田友子、米澤倫子）がこれを引き継ぎアーサー・ハル招聘によるドラムサークル・ファシリテーター研修を年に一度開催してきました。

元来、ドラムサークル・ファシリテーターの養成はアーサー・ハルの強い意志により彼本人以外には許されていませんでした。その為、春のアジアツアー、秋のヨーロッパツアー、その他アメリカ国内での研修のためにと、アーサー自身が東奔西走していました。しかしながら 2016 年アーサー・ハルが 70 歳を迎えるにあたり、彼の理念とティーチング理論を継承するためアメリカ、イギリス、ノルウェー、ドイツ、スペイン、イタリア、インド、マレーシア、オーストラリア、韓国、日本 11 か国から 16 人の VMC トレーナー候補者が選出されました。その後約 1 年かけてアーサー

本人が候補者の住む国を訪問し、候補者と共に研修でのトレーナーを務めながらその資質を見定める最終審査を行いました。そして、2017年11月スコットランドに候補者全員が集い、TTT研修（Train-the-Trainer = トレーナー研修）を経て最終的に計16人のVMC認定トレーナーが誕生しました。

最初の日本人トレーナー認定を受け2018年10月にはアーサー・ハルも理事の一人に加わり、日本人のためのドラムサークル・ファシリテーター研修所として「一般社団法人VMCグローバルジャパン」が創設されました。VMCグローバルジャパンでは、①日本語によるベーシック研修②海外講師による研修及びイベント③オンライン講座の開催を事業の3つの柱としています。日本語に翻訳されたVMC理論書とテキストを基に日本語で学ぶ3日間にわたるベーシック研修の開催をはじめ、日本より10年進歩していると言われるアメリカやコミュニティ・ミュージックの先進国ヨーロッパなどの優秀なドラムサークル・ファシリテーターを紹介しています。また、VMCグローバルジャパンの日本人講師がインドで開催された研修に招かれるなど、日本と海外との双方向的交流も積極的に行っています。

さらに、2019年2月にはアメリカ・プレスコットで2回目のTTT研修が開催され、アメリカ、カナダ、香港から16人のトレーナーが新たに加わり計13か国総勢32人のトレーナーが誕生しました。しかしながら、その直後に新型コロナ感染拡大による自粛生活が始まり、VMC認定トレーナーの活動も大幅に制限されてしまいました。もともとVMCグローバルメンバーの間では、国を超え繋がり合うためにZoomを使った定期的なオンラインミーティングが開かれていました。そこで、対面がかなわない現実を受け入れ、Zoomを使ったオンラインによるセミナーへと早期にシフトして活動を続けることができました。特に、日本発の「オンライン万歳!!」と題した7カ国12人の講師による週末セミナーの開催や、対面授業ができないカナダの小学校でのオンライン授業において、日本の太鼓をはじめいろいろな国のリズム文化背景を持つVMCグローバルメンバーが講師を務める試みなどの挑戦は大きな成功を収めることができました。いかなる状況であっても諦めることなくVMCグローバルメンバーが支え合い助け合いながら各人の強みを生かし、今もそれぞれの国で各々工夫した形での研修を継続開催しています。

また、新型コロナ感染症の世界的流行に伴う外出行動制限などが徐々に緩和され始めた2022年10月には、偶然にもイタリア、インドそして日本でほぼ同時期にベーシック研修が開催され、3カ国で100名を超えるVMC受講生が研修を修了しました。翌年2023年にはさらに拡大し、毎月世界のどこかで研修が開催される予定です。

9) 研修についてご紹介ください。

①世界共通のことばである「リズム」を通じて、一人一人がつながり合い支え合うコミュニティを形成し得る事

②人それぞれの置かれている状況や背景がいかなるものであったとしても、形作られたコミュニティの中で互いを認め尊重する心を育み得る事

ドラムサークルとは、これらの可能性を発見するための体験型学習の場です。VMC研修は、その理念に基づいてファシリテーターがドラムサークルの現場を安心安全に進行する役目を担えるようになることを最大の目的として構成されています。

ドラムサークル・ファシリテーションの基本を学ぶ研修には、時間数によって①ファシリテーター

ションの基礎の基礎を体験する「ワンデイセミナー（2～8時間）」②ファシリテーションの基礎を学ぶ「ベーシック研修（20時間）」③5日間にわたり寝食を共にしながら基礎から応用まで学ぶ「インテンシブ研修（約50時間）」があります。これらの研修は決してファシリテーションの「形」を学ぶためのものではありません。最も重要なコンセプト「学び方を学ぶ」を理解し実践することが目的です。研修に繰り返し参加し同じプロセスを振り返ることでファシリテーターとしての成熟度を自分で見極め、さらに熟達できるように組み立てられています。

また、ファシリテーターとしての実践的スキルを磨く「アドヴァンス研修」、ファシリテーターとしてのリーダーシップを学ぶ「メンター研修」など目的に応じて種々の研修を行っています。

2019年までは年に一度海外から講師を招聘し研修を開催していましたが、新型コロナウイルス感染拡大により海外からの来日が難しく研修の延期が余儀なくされてきました。しかし、2023年のゴールデンウィークには、7年ぶりにアーサー・ハル、8年ぶりにジム・ボノウの二人をアメリカから招き、メンター&インテンシブ研修を開催することができることとなりました。

また、VMC グローバルメンバーによるオンラインセミナーも随時開催しており、いろいろな国のドラムサークル事情やドラムサークルに関する研究などを Zoom を通して紹介しています。

なお、VMC では研修のことを「プレイショップ」と呼んでいます。ワークショップではなく、プレイ（＝遊ぶ、演奏する）しながら楽しく学ぶという意味が込められています。研修では、その場に集まった受講生同士がつながり合い互いに学びあう環境を整え、研修を楽しみながら遂行出来るようにプログラムが構成されています。さらに、学校など制限がある場合を除き、講師一人が「教える」形態ではなく、ドラムサークル・ファシリテーターとして研鑽を積んだ先輩や人生の先輩であるベテランのファシリテーターも共に受講生として参加できるようにしています。その結果、研修中においても多世代で形成されたコミュニティの中での学びを実体験することが可能となっています。またベテランのファシリテーターにとっても、初心者と共に学ぶことで自分の理解度をさらに深めることになり、講師も含めその場に集まった全員によるシナジー効果が生みだされる研修を作り出しています。

10) コンセプトについて教えてください。

アーサー・ハルは、一般的にワークブックと呼ばれるテキストのことを「ライフブック」と呼び、VMC 理論の基となるコンセプトは学び方のみならず生き方の指針となるように作られていると述べています。

以下に代表的なコンセプトをご紹介します。

①「間違いはありません。ただ学びの瞬間があるだけです。」

ドラムサークルは即興的音楽イベントであり、一度として同じドラムサークルはありません。研修中の実践練習だけでなく実際に行うドラムサークルにおいても、参加者やその他の要因による予想外の出来事や反応などに戸惑いファシリテーションが上手くいかないことが起きてしまいます。その時にその出来事や反応を失敗と捉えず学びの瞬間と考えることができれば、より良い結果を生み出すために何をすべきだったかと再考することができ、自らの力で次へと進むことができるでしょう。

②「小さな成功を作り出す。」

いきなり高度な音楽的要素を求めたり演奏を強要するのではなく、楽器を手取るだけで良し

とし、一音でも打ち鳴らすことができた時の喜びを共有できる環境を整えるようにすることの重要性を指摘しています。

しかしながら、アーサー・ハルはそれら基本的コンセプトの数々さえも敢えて氷山の一角に過ぎないと喩え、「さらになお重要なことは私たちドラムサークル・ファシリテーターは、実践と学びを繰り返しながら、水面下に隠された大きな氷の塊、すなわち人間そのものを少しずつでも理解しようと努力し学び続けることである。」と研修で常に伝えています。まず研修で学んだVMCコンセプトを実際の現場に持ち帰り、失敗と成功を繰り返しながらスキルを磨きます。そして、さらに現場で生まれ一層深まった疑問や問題を抱え研修に戻り、再びコンセプトを探求することで学びを深めていくことが大切だと考えています。

最後に、VMCでは揺るぎないコンセプトの下でも柔軟に理論の見直しを続けています。時代とともに変化する多様な価値観を持つ人々が集い作り出す音楽をファシリテートする以上、具体的な方法論は変容するものと考えています。研修で使用するテキストの表紙には次のような文章が誇らしく掲げられています。「このテキストは、これからも進化していきます。改善・修正すべきところなどお気づきの点があればお知らせください。」70歳半ばを迎えたアーサー・ハル本人が、自分が認定したVMCグローバルトレーナーからの新しい価値観や発見を受け入れ、理論を再考することに逡巡することなく新たに気づいてくれたことに対し素直に喜ぶ姿勢は、VMCコンセプトのお手本となっています。VMCグローバル認定トレーナーたちは、教える立場であると同時に学び手の一人であるという立場を忘れず、常に受講生からの声に対しオープンマインドで応じ、さらなる進化を遂げるべく互いに研鑽を積んでいます。

※この文章をまとめるにあたり以下の資料を参照しました。

参考文献

アーサー・ハル著、「ドラムサークル・スピリット」佐々木薫監修、佐々木薫、速水葉子、増永紅実訳、(株) ATN、2004年10月1日

Arthur Hull、「Drum Circle Facilitation : Building Community Through Rhythm - Illustrated, June 1, 2007

アーサー・ハル、ネリー・ヒル著、「ドラムサークル・ファシリテーターズ・ハンドブック日本語版」横田朋子（友子）監修、速水葉子、横田朋子（友子）翻訳、アトラス出版、2014年5月6日